

ブラジル パラナ州における移民の受容と共存

小嶋茂

ブラジルへの移民の導入は、奴隷解放によって生じた労働力不足の解消や白人国家の建設を目的として始められた。サンパウロ州および南部3州が移民州として知られているが、パラナ州の特徴は、その移民受け入れ総数では、4州の中で一番少ないものの、州都クリチーバが「エスニクラボラトリー」と呼ばれるように、60余りにおよぶ一番多様な移民を受け入れていることである。

19世紀初頭から始まるパラナ州への移民導入の背景には、人口空白地帯への植民や家畜隊商を襲撃するインディオの問題などがあった。北部地帯にはサンパウロ州のコーヒー経済の延長として入り込んだイタリア人・スペイン人・ポルトガル人・日本人など、南部地帯にはリオグランデドスル州やサンタカタリーナ州から植民として入り込んできたイタリア人・ドイツ人・ポーランド人などの先駆者がいる。

移民の導入には大土地所有者・政治家・土地会社などが関わったが、一貫した政策が取られたわけではない。本発表では個別の政策面よりも、結果としてのその現状を歴史的視点から分析することにより、パラナ州へどのように移民が入り、影響を与え、そして現在のような移民文化が尊重される社会、エスニクラボラトリーが形成されるようになったのかを提示したい。さらには時間が許せば、そうした社会に参加する日系人の存在についても触れ、アメリカの日系人や日本のデカセギが直面する状況との比較に触れたい。